

# 野付・風蓮・春国岱の自然

—— 野付風蓮道立自然公園 ——



1997

北海道自然保護協会

# 野付・風蓮・春国岱の自然

—— 野付風蓮道立自然公園 ——



北海道自然保護協会

## 野付風蓮道立自然公園

根室支庁管内の野付崎、風蓮湖、春国岱<sup>しゅんくにたい</sup>、温根沼などの海跡湖、砂嘴によって特徴づけられる自然公園で、面積はおよそ164平方キロメートルあります。1962年(昭和37)12月に指定を受けております。

野付崎はエビが背をまるめたような形をした砂嘴で、これに囲まれた内海は尾岱沼といいます。夏の日には、シマエビを採る白い帆を張った打瀬船が滑るように行き交い、美しい風物詩となっています。また、地盤沈下によって生じたトドワラ、ナラワラは特異な景観を見せてくれます。海岸草原は長く、広く砂嘴の先まで連なり、時にあわせてヒオウギアヤメ、ハマナス、センダイハギなどで飾られます。時間を忘れてゆっくりと楽しみたい花園です。

風蓮湖や春国岱付近は、広漠とした平らな風景が大変に魅力的で、広い北海道をより広くみせ、人の世のしがらみをひとときでも忘れさせてくれる雰囲気があります。砂丘のうえにできたアカエゾマツ林の両側には湿原が広がり、ガン、カモ、シギをはじめ、あまたの鳥の楽園となっています。タンチョウの営巣地も多く、冬にはハクチョウの大群が飛来いたします。1万羽以上集まるといいます。

晴れた日には、目の前に北方の島、国後島が横たわり、目を転ずれば知床半島の山々が連なっています。いいしれぬ感慨がこみあげてまいります。

表紙 野付崎  
扉 春国岱のアカエゾマツ林  
公園の紹介 ツルキジムシロ



ツルキジムシロ

## 推薦のこ ば

北海道は、雄大な山岳とそのふもとに広がる原始の姿をとどめる深い天然林、広大な湿原や湖沼群、そして大空を飛ぶ鳥や山を越え、川を渡る獣など、北国らしい豊かな自然に恵まれており、六つの国立公園、五つの国定公園、十二の道立自然公園を持っています。

「野付風蓮の自然」は、こうした自然公園のうち、昭和37年12月に指定された道立自然公園である野付風蓮道立自然公園を紹介したもので、自然公園ガイドブックのシリーズとして5冊目となります。

野付風蓮道立自然公園は、海岸に造形された狭長で低い地形と海に面する大小の水域からなり、砂嘴として知られる野付半島や広大な海跡湖の風蓮湖・温根沼・長節湖、また雄大な根釧台地の水平景観を背景にした砂丘海岸やヨシに覆われた湿原などがあり、タンチョウの繁殖地になっているほか、シマフクロウ、オオワシ、オジロワシ、クマゲラなどの天然記念物に指定されている鳥類も多く見られるなど、特色あふれる自然公園です。

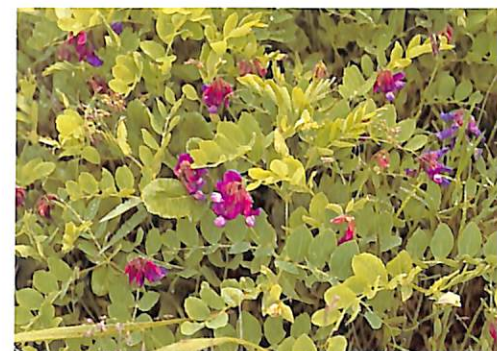
優れた自然環境は豊かな人間生活の基盤であり、私たちに様々な恵みをもたらす源泉でもあります。この北海道の優れた環境を大切に守り育て、次の世代に引き継いでいくため、私たち一人ひとりが自らの暮らしを見つめ直し、環境重視型の地域社会づくりを進めることが大切だと思います。

このガイドブックが多くの皆さんに愛読され、北海道の自然について理解と関心を一層深めるきっかけとなることを、心から願っています。

北海道知事 堀 達 也



春国岱のオオバナノエンレイソウ



春国岱のハマエンドウ

## 最も北海道らしい魅力をたたえる野付・風蓮の自然

北海道の中でも最も北海道らしい景観といえば、私はいつも根室を中心とする東北海道を思い起こします。東北海道のイメージは、広々とした牧場、サイロのある農家、原野、一直線の道路、ところどころに残る森林、防風林、そしてゆったりと曲流する河川、その水の流れを湛え、砂州から海に連なる湖沼の群れ、といった光景です。そこには大地と共存する人々の営みと、水と緑と野生鳥獣に象徴される自然の営みが、一体となった環境が形成されています。

そのうち自然のエッセンスをひとまとめにした部分が、野付風蓮道立自然公園です。この道立自然公園の骨組みは、①風蓮湖、温根沼（おんねとー）など水平景観を満喫できる海跡湖、②地図で見ればエビが背を丸めたような、奇妙な形をした野付崎の砂嘴（さし）と、それに抱かれる尾岱沼（おだいとう）の水面、という二つの部分から成り立っています。その骨組みを飾るような、砂丘の上に発達したアカエゾマツ林の春国岱（しゅんくにたい）、ハマナス、エゾスカシユリなどが咲く海岸植物群落、滅びゆく悲しさを感じさせるトドワラやナラワラの枯木立、そして、タンチョウ、ハクチョウ、ガン・カモ類、シギ・チドリ類などの野鳥が、季節ごとに自然の息吹を伝えてくれます。

この魅力的な自然の成り立ちを、ひとりでも多くの方が理解して下さる媒体として、この小さな本が、皆様のお役に立つことを願っています。このガイドブックを作るに当たっては、北海道、前田一歩園財団、PRO NATURAファンドから、ご助成いただきましたことにお礼を申し上げます。

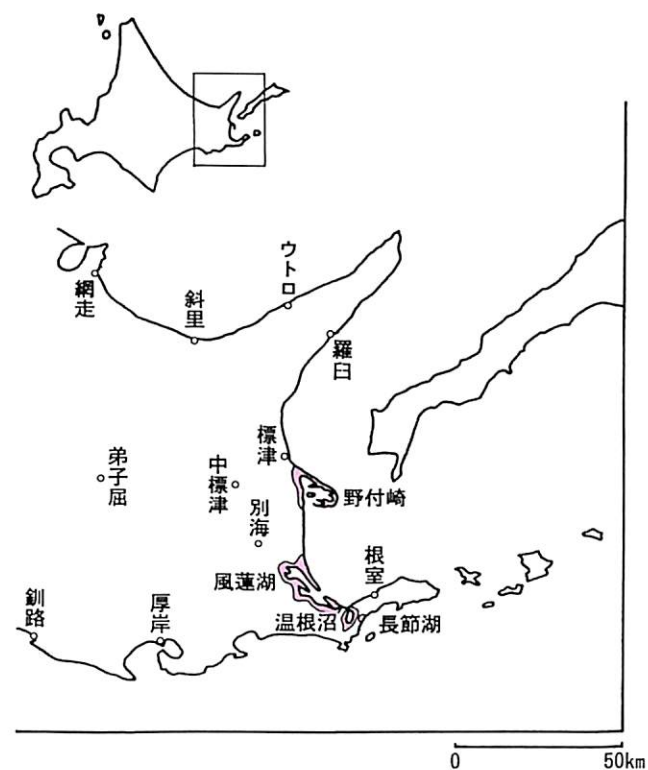
社北海道自然保護協会会長 俵 浩 三

## 目 次

|          |             |
|----------|-------------|
| 痩せていく砂嘴  | 八木 健三 …… 4  |
| 野鳥の楽園    | 高田 勝 …… 12  |
| 春国岱の森    | 黒沢 信道 …… 20 |
| 生きものたち   | 近藤 憲久 …… 28 |
| 四季の彩り    | 高嶋八千代 …… 34 |
| 豊かな西別川   | 河井 大輔 …… 42 |
| 暮らしがあった  | 本多 克代 …… 48 |
| あとがきにかえて | 佐藤 謙 …… 55  |
| イラストマップ  | 村野 道子 …… 2  |

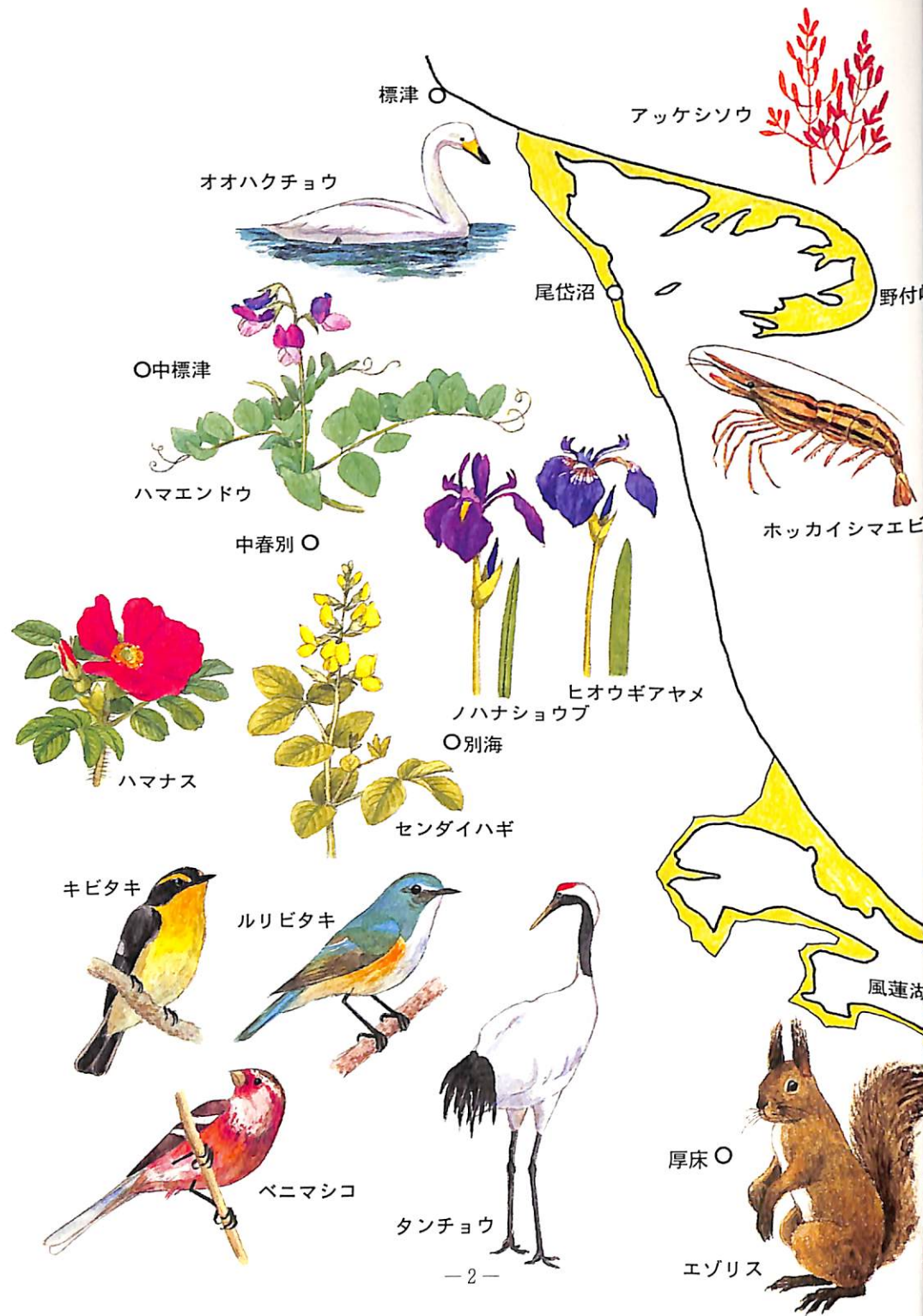


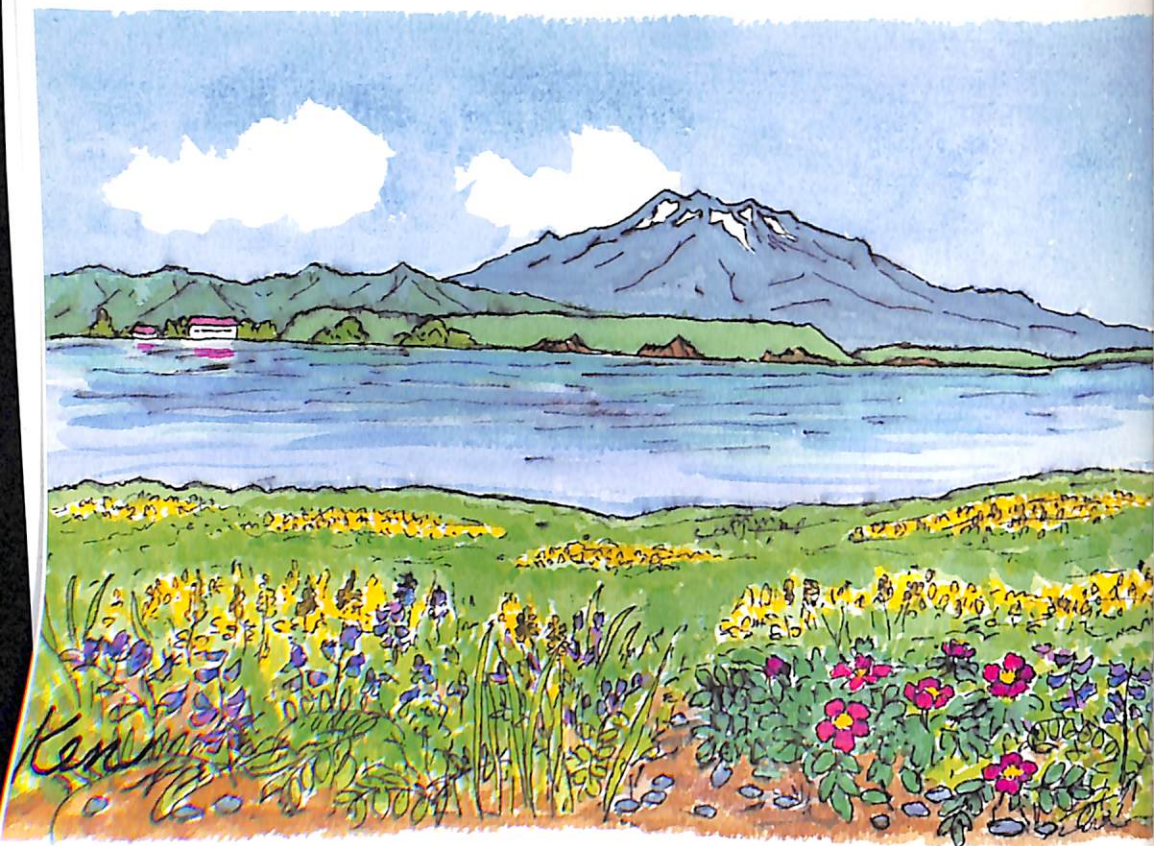
尾岱沼



1985年頃のトドワラ

# 野付・風蓮・春国岱の自然





百花繚乱の野付崎

## 痩せていく砂嘴 野付崎と風蓮湖

八木 健三

北海道の地図を広げると、道東と千島の国後島とに挟まれた根室海峡に、エビの尻尾のように曲がった細長い崎が飛び出ているのが眼を引きます。これが野付崎、その付け根から先端までの全長は26 kmもあり、日本一の砂嘴です。

私たちが道東の旅で訪れたのは6月半ば、標津のあたりから眺めたとき、国後島を背景に輝く海のなかに細い砂州が長く伸びていました。その野付崎で、ハマナス、センダイハギ、ハマエンドウなど、とりどりの花が咲き乱れる草原に皆で腰を下ろし、晴れた空に響く雲雀の囀りを聞いた喜びは忘れられません。

かつてここを訪れた文豪大町桂月が“北海の天の橋立”と賞賛したということですが、スケールでも豊かな自然でも、天の橋立はとうてい野付崎には及ばないでしょう。

野付崎のトドワラ  
(佐藤 謙氏の写真より)



## 特色のある地形

図-1を見て下さい。根室海峡に面する外海側は滑らかな円弧を描いており、これに平行に何本かの浜堤が延び、その高さは海拔1-4m程です。これにたいして、西側は沢山の尖った岬が野付湾に突出しています。

一体この複雑な形の砂嘴はどのようにして出来たのでしょうか。

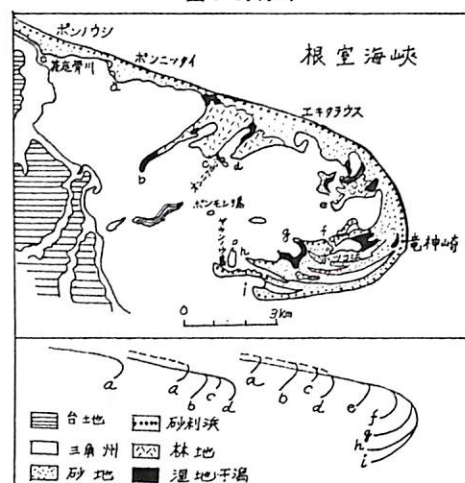
砂嘴を造っているのは、大部分が砂と礫です。なお所々泥炭や湿地も見られます。礫はよく円摩されており、調べてみると、主に標津の北から知床半島にかけて分布している安山岩であることがわかります。地表近くには厚さ2-5cm程の火山灰の薄い層が見られ、雌阿寒岳の火山灰(Me-a)(約200年前)とされています。

さらに下部には厚さ20cmの火山灰層が存在し、矢臼別火山灰(約2280年前)とされています。

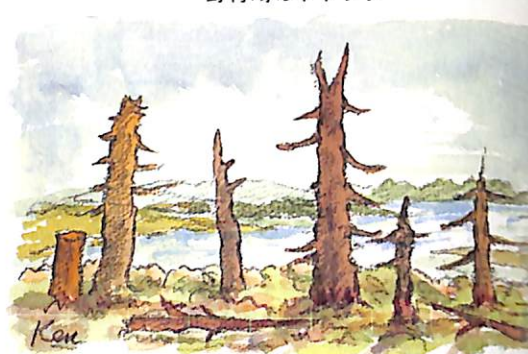
根室海峡では北西からの卓越風による波が国後島にあたり、南西に向かう沿岸流となり、これが海岸段丘を削りそこから砂や礫を運び、標津の南に広がる浅い海底に堆積して、このような砂嘴が造られたのです。

この砂嘴は砂丘が細長く延びた浜堤と、その曲がった先端から、内湾に向かって掌のように開いた尖岬群とで出来ています。図-1にはそれらの名を示しました。

図1 野付崎



野付崎のトドワラ



野付崎より斜里岳(右)を見る



野付崎の打瀬舟

## 砂嘴の形成

砂嘴の形成は次のように考えられています。海水準の上昇、もしくは地盤の沈下の場合には、沿岸流は古い砂嘴の曲がった内側の尖岬は残し、外海側の浜堤を侵食し、それを素材にして侵食した部の内側に新しい砂嘴をつくったのです。即ちaの砂嘴の浜堤を削り、新しい浜堤がつくられ、その内海側にb、c、dの尖岬をもつ砂嘴をつくりました。

尖岬b、c、dには他の尖岬には見られない森林が繁茂したオンニクルがあり、海峡側には標高6mに及ぶ地点があり、現在より高い海水準だったことを示しています。

さらにその後一旦下がった海水準が再び上昇して、この砂嘴の浜堤を切ってe、f、g、h、iの尖岬をもつ砂嘴がつくられたものと考えられます。これらの関係を図-1に示しました。

火山灰層の時代から、野付崎の形成は縄文海進から海退して、現在の海水準になった3000年前頃に始まったと考えられています。

## 縮小する砂嘴

オンニクルにはトドマツやミズナラの大木が森林をつくっていますが、なかにはすっかり枯れてしまった木々が立ち並ぶ、トドワラの光景が眺められます。これは地盤の沈下によって海水が浸透し、湿原となり泥炭層が堆積したものです。なおこの付近には、先住民族の住居跡も見られます。

また他の尖岬でも海水の浸透によって、干潟になっている所も少なくありません。このように野付崎は次第に痩せてゆくことが観察されます。このような内湾での砂嘴の縮小は1924年以降現在までの地形図を比較してみると明らかになります。これは道東の根室海峡に沿う地域全体に、地盤沈下が起こっていることによるものです。これについては、次の春国岱で詳しく調べて見ましょう。



風蓮湖より知床連山を見る

## 風 蓮 湖

野付崎の南30kmほどにある風蓮湖は周囲58km、面積52km<sup>2</sup>の広大な湖で野鳥の楽園であります。20kmも延びた砂嘴によって、根室湾から分かれた海跡湖で、汽水湖としては日本第5位、北海道では佐呂間湖、能取湖に次ぐ大きさです。

西南の内陸側は平坦な丘陵に囲まれ、ヤユシュベツ川、風蓮川、別当賀川などが流れ込み、河口には三角州が形成されています。

水質はCl 12-3.8g/lで汽水質です。水深は潮口では8-11mですが、湖内は1m未満と浅く、湖底の大部分は干潮時には露出しています。

### 風蓮湖の地形と地質

風蓮湖周辺の地質は地形とよく関連し、低地は沖積層の砂、泥、泥炭からなり、河岸段丘や低い台地は洪積層の泥、砂、礫、火山灰などで構成されています。これより高い地域は、最も古い白亜紀の根室層の砂岩、泥岩、礫岩、角礫凝灰岩から構成され、ときにはドレライトの貫入もみとめられます。

風蓮湖の東、東梅から別海の歩古丹にかけて、長さ20kmにも及ぶ

ノハナショウブと第三砂丘（春国岱）



ハマナスの咲く第一砂丘（春国岱）



第一砂丘より第二砂丘（春国岱）



枯れ始めたアカエゾマツ（春国岱）

長大な砂嘴が発達しています。この砂嘴は野付崎を作り、さらに南下する沿岸流によって運搬された土砂で形成されたもので、その南の半分が春国岱とよばれています。

### 春国岱の地形と地質

春国岱は延長8km、幅1.3km、面積6km<sup>2</sup>の沿岸州です。春国岱は外海側から第1、第2、第3の砂丘が並び、その間には低湿地が発達しています。外海側にある第1砂丘は最も新しい砂丘で、大部分が砂からなり礫はあまりありません。砂は斜長石と少量の輝石からなる安山岩質の砂で、根室付近の海岸に見られるドレライト質の砂とは全く違います。5-30cmの深さに火山灰が存在しています。

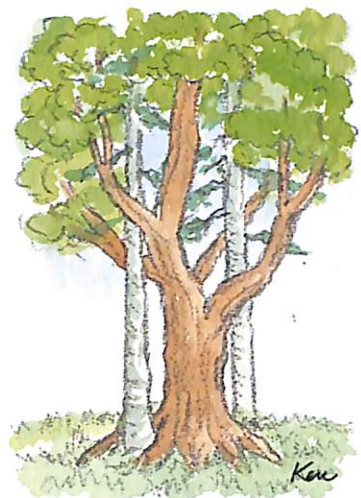
中間の第2砂丘と風蓮湖湖畔に広く分布する第3砂丘は、ともに表層はすべて草や樹木におおわれ、火山灰は砂層の上にあり、さらにその上に腐植土が厚くおっております。

この火山灰は僅かに軽石質-砂質で、黄褐色-灰白色、その性質と堆積層位から、雌阿寒岳火山灰（Me-a、約200年前）に相当するものと決定されました。

この火山灰の分布から、第2、第3の砂丘は200年以前の生成、第1砂丘はそれよりも若い生成であることが確かめられました。

また風蓮湖の泥炭層の下部には、矢臼別火山灰層（約2280年前）があります。これらの火山灰層の存在から、春国岱の形成も野付崎とほぼ同じく、3000年前あたりに始まったと推定されます。

これらの砂丘の間は湿地となっており、泥炭の堆積も見られます。第1砂丘にはハマナスの見事な群落があり、さらに第2砂丘には、アカエゾマツの群落があることはあまりにも有名です。そして第3砂丘では、そのアカエゾマツが衰えて、次第にトドマツに交代されています。



トドマツを抱えたミズナラ(春国岱)

### 痩せる砂嘴

野付崎では砂嘴が次第に痩せていくことが明らかにされましたが、春国岱では砂嘴はどのように変化したのでしょうか？

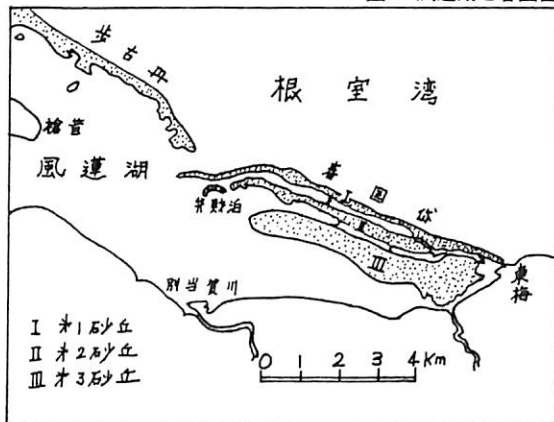
そのために1897(明治30)年、1922(大正11)年、1936(昭和11)年、1977(昭和52)年の5万分の1地形図を比較してみました。その結果、春国岱でも砂嘴が次第に縮小していくことが明らかになりました。

とくに著しいのは春国岱の北西の端、<sup>はしりこたん</sup>走古丹と相対する外海への開口部付近です。もともとこの部分はひと続きの砂嘴だったのが、後に述べるように地盤の沈下で切れ、海水が進入するようになったのです。

その後1897年、今から100年前には一つであった春国岱が、砂丘の間に次第に海が入り込み、ついに第1、第2砂丘の先端は細い帯状になって分かれ、丸い弁財泊の島が三日月の小島になってしまったのです。またこの付近にあったトドマツ林が、海水の進入でトドワラとなりました。

これらの変化の原因を調べたところ、根室海峡にそう地域全体の沈降現象によることが明らかになりました。1903(明治36)年から1955(昭和30)年にいたる52年間に、標津一本別海一東梅の一等三角点は21-34cmも沈降しました。また1903年から1955年-76年までの52-73年間(風蓮湖海岸線は内陸へ路線変更)では、沈降量は40-63cmに達し、平均7-8mm/年の割合で沈降しています。もう1つの原因は道東地域のダムの造成で、河川から海への土砂の供給が減少したことにあると考えられます。

図2 風蓮湖と春国岱



春国岱北端の浸水した部分の木が枯れている  
左の林は第三砂丘

### 道路計画の取り止め

私たちがこの調査をしていた1984年前後、根室市は春国岱の第1砂丘の上に道路を建設する計画を進めていました。国後島を眺める道路というわけで、「望郷道路」と呼んでいました。

私は「こんな軟弱な地盤に高速道路を造ったら、地震のときには必ず流動化現象が起こり大変なことになる。しかも根室地域は地震学者が20-30年後に大きな地震の可能性を警告している」と、市長にも申し入れをしました。幸いなことに、その計画は中止になってホッとしたことが思い出されます。

ただ砂丘の侵食を防ぐために、テトラポットが外海におかれたため、美しい自然海岸がなくなったのは残念です。

そのころともに春国岱の調査をした吉元豊さんと三浦二郎さんが、昨年亡くられました。ここにお二人のご冥福を祈ります。



冬の朝の風蓮湖

## 野鳥の楽園 —— 野付・風蓮の野鳥 ——

高田 勝

根室地方は、全国でも有数の野鳥の生息地です。これを数字で見ると、根室支庁管内で1972年以来記録された野鳥の種数は344に達します。

日本全体の野鳥の種数は、唯一の認定機関である日本鳥学会の発表では、490となっています。(日本鳥類目録改訂第5版、1974)

しかし、これは20年以上も前の数字で、その後の観察記録の増大により、現在の種数は560から570の間になると言われています。

正式な種数は、新しい目録が発表されるのを待たなくてはなりません。まず550くらいは認められるのではないのでしょうか。

日本の鳥の種数を550と仮定して、根室地方の種数の割合を見ると、61%となります。

つまり、日本の鳥の半数以上が記録されている訳で、野鳥の宝庫という言葉は数字の上からも認められます。

ところで、根室地方の野鳥の生息地の中でも、とくに重要な地域が、「野付・風蓮道立自然公園」です。

この地域では、これまでに270種の野鳥が記録されていますが、これは支庁管内の種数の79%にあたります。

このように野鳥が豊富な理由の第一にあげられるのが、環境の多様さでしょう。

野付地域、風蓮湖地域ともにまず目に付くのが、質の高い湿原と森林を持っているという点です。

湿原が生物生産性に優れ、水質浄化の面でも大きな役割を果たしていることは、近年よく知られるようになってきました。

鳥にとっては、湿原に大量に発生するカエルや小魚、蚊やカゲロウなどが、またとない餌になります。

タンチョウやクイナ、アカアシシギなどは湿原の中に巣を造ります。餌がたっぷりある上、敵が近寄りにくい所なので、一石二鳥という訳です。



湿原の主、タンチョウ。一羽は生態調査のための足環を付けている



卵を温めているアカアシシギ



珍しく木にとまるキアシシギ



渡りの頃は畑にも来るルリビタキ



明るい林を好むキビタキ

湿原の他に、それほど草の生えていない、いわゆる湿地と干潟も、よく発達しています。

湿地や干潟には、春と秋にシギやチドリの仲間が大群でやってきます。

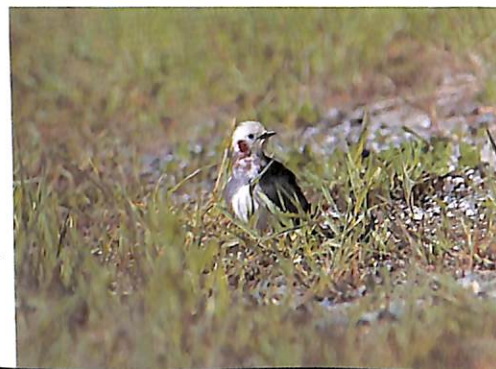
全国の湿地や干潟が、埋め立てなどによって急速に姿を消していく中で、野付・風連道立自然公園地域は、渡り鳥たちに残された、数少ない中継地としても、きわめて貴重な所なのです。

一方、森については、野付と風連両地域ではちょっと違いが出てきます。野付地域では野付崎（半島）の中央部に、よく発達した大木の森がありますが、ほとんど広葉樹です。

風連地域では、春国岱に素晴らしい森がありますが、こちらは針葉樹の純林と、針葉樹・広葉樹が入り交じった混交林の二つのタイプで成り立っています。

野付崎も春国岱も、同じような過程を経て生まれた砂嘴なのに、森の中身が違うというのは、不思議なことです。

長方形に穴を開けるクマゲラ



地上で餌を探す  
コムクドリ

一説によると、野付地域を含む根室地方中部には、昔から針葉樹は無かったといえます。

森の中身が違えば、生息する鳥の種類も変わってきます。

たとえば、野付崎の森にはヤマシギやハリオアマツバメといった鳥が普通に見られるのに、春国岱の森では見られないか、見られても、ごくまれです。

反対に、春国岱の森に多いルリビタキやキクイタダキといった鳥は、野付崎では見られません。両方とも、針葉樹林を好む鳥だからです。

もちろん、アカゲラやキビタキ、アオジ、アカハラなど、両地域に共通のものもたくさんいます。

ルリビタキという鳥については、面白い話があります。

この鳥は、日本では四国の高い山の上と本州中部以北の亜高山帯から高山帯にかけて、そして北海道の亜寒帯樹林地帯で繁殖します。いずれも針葉樹林帯です。

ひとことでいえば、ルリビタキは海拔2000～2500mあたりの針葉樹林帯に棲む鳥なのです。

ところが、春国岱の森はほとんど海拔0mです。そんな所からルリビタキの美しい歌声が響いてくると、本州方面から来たバード・ウォッチャーたちは一様に戸惑ってしまうのです。

無理ありません。森の木々の梢の上をカモメが飛んだり、ヒバリの声さえ届いてくる所なのですから。

さて、湿原、湿地、干潟、森という特色ある環境の他にも、この地域には野鳥の好む環境が多くあります。

まず草原です。一口に草原といっても、どれも同じではありません。



もっとも普通に見られるハクセキレイ



草原の元気者ベニマシコ



「日の丸」とも呼ばれるノゴマ



飛ぶと白黒の目立つノビタキ

たとえば、波打際に近い砂浜には、ハマニンニクという背の高いイネ科の草を中心とした草原が広がっています。

こういう草原は、ヒバリ、ハクセキレイ、オオジュリンといった鳥が好み、冬になるとユキホオジロ、ハギマシコ、ベニヒワ、ツメナガホオジロなど、バード・ウォッチャーに人気の高い鳥たちが、地上にこぼれた種子をねらって、やってきます。

もう少し内陸に入った所には、セリ科やキク科植物などのまじった草原があります。

こういう草原は、マキノセンニュウ、シマセンニュウ、コヨシキリ、シマアオジといった鳥が、好んで住みつきます。

ただ、シマアオジが近年激減しているのが気がかりです。

羽の色が華麗で、歌声ものどかで美しいこの鳥は、草原のスターとして、かつては北海道中で目と耳を楽しませてくれたものですが、今では一日がかりで探しまわっても見られないことすらあるようになってしまいました。幻の鳥となりつつあるのです。

南方の越冬地で、食用に大量に捕まえているという噂もありますが、今のところ確かな原因はつかめていません。渡りの中継地の環境悪化や、北海道の草原の減少も、激減要因の一つであることは、

大いに考えられます。

さて、今一つの草原…といっても、正確には草原とは呼べないかもしれませんが、大事な環境として、ハマナス群落をあげておかななくてはなりません。

野付・風連両地域とも、海岸線にはみごとなハマナス群落が展開していて、花の時期に脇を通ると、強烈な香りにむせかえりそうになります。

このハマナス群落は、トゲだらけで、キツネやカラスなど、大型の動物は容易に入りこめません。

そこで、ノゴマやノビタキ、カワラヒワといった鳥たちが、この群落の中に好んで巣を造るのです。

また、ハマナスの実実は冬になっても落ちないで枝に残っているものが多いので、カワラヒワやギンザンマシコなどの貴重な餌になります。

野付から風連にかけては、遠浅の海になっていて、大潮の時には広大な砂浜が姿を現わします。

砂浜には、ミユビシギやキョウジョシギ、ハマシギなど、一部のシギたちも集まりますが、とくにカモメ類が喜んで寄ってきます。

根室地方で普通に観察できる八種のカモメ類(シロカモメ、ワシ

かつては草原のスターだったシマアオジ

日本一長くさえずるマキノセンニュウ  
(20分連続の例あり。ただし夜)



冬に群れでやってくるベニヒワ



一年中見られるオオセグロカモメ



冬に数多くやってくるシロカモメ



近年、毎冬やってくるようになった珍鳥ヒメハジロ



野付沖や風蓮湖に大群でやってくるコクガン

カモメ、オオセグロカモメ、セグロカモメ、ウミネコ、ユリカモメ、ミツユビカモメ、カモメ)は、すべて野付・風蓮地域の海岸で見ることができます。

とくに、冬期間やってくるシロカモメの数は圧倒的で、この地方でもっとも普通な留鳥であるオオセグロカモメの数をもしのぐほどです。

シロカモメは、ほかのカモメ類が見向きもしないヒトデを好んで食べますが、この地域の遠浅の海にはヒトデが多く、それが数多く集まる理由の一つと考えられます。

さて、残る環境である水面を見てみましょう。

この地域では、海水と汽水(海水と淡水がまじる)それに淡水と、三つの異なる水面があります。

海水域には、ウミスズメ類、ウ類、潜水採餌ガモ(水中に潜って、貝や小魚などを食べます。一般に海ガモ類と呼ばれます)などが数千から時には数万の単位で集まります。

汽水と淡水の水域には、ガン類、ハクチョウ類、水面採餌ガモ類(潜らないで、首だけ水中に突っこみ、水草などを食べます。淡水ガモとも呼ばれます)などが、数万単位で集まります。

野付湾と風蓮湖には、こうした水鳥たちの大好物である、アマモという水草がびっしり生えているし、面積も広いため、このように数多くが集まるのです。

ただ、大群が見られるのは渡りの途中の春と秋だけです。夏はほとんどが北の繁殖地に行ってしまうし、冬は結氷して餌がとれなくなるからです。

春と秋の、大群が集まる頃には、それをねらって、オオワシ、ハヤブサ、オオタカ、チュウヒなどというワシやタカの仲間も姿を見せます。

以上のように見てくると、野付・風蓮道立自然公園地域で、野鳥の好む環境で欠けているのは三つだけ、ということが分かります。

すなわち、ハイマツ帯と河原それに磯です。しかし、実際のところ、そうした環境にしか棲まない鳥というのは、ほんの少しです。

多様な環境に恵まれてこそ存在する、野鳥の宝庫。しかし、この地もご多分にもれず、水質の汚染や森林の減少といった環境破壊の波が押し寄せてきつつあります。

コンピューター全盛時代、人間の真の英知をもって、貴重な環境を守りたいものです。



一部越冬するオオハクチョウ



冬の空の王者オオワシ



林縁には枯木も見られる森の外観

## 春国岱の森

### —— 砂丘のアカエゾマツ ——

黒沢 信道

風蓮湖とオホーツク海を隔てるように伸びている砂州は、春国岱という一風変わった名前をもっています。名前の由来は、アイヌ語の sunk (エゾマツ) nittai (林) で、これに漢字を当てたものです。

地形や動植物に詳しくあったアイヌの人々が、どうしてここをわざわざ「 sunk nittai 」と呼んだのか。おそらくこの地域のアイヌの人々にとって、海岸の砂丘の上に (アカ) エゾマツの林があることは珍しく、特徴のある場所だと思われたからでしょう。

それもそのはず、砂丘上に発達したアカエゾマツの林として知られている場所は、日本ではここだけ、世界的に見てもわずか2ヵ所しかないのです。春国岱は、そんな貴重な林の中を手軽に散策できる場所です。

しかし、それだけではありません。どうしてここにアカエゾマツの林が成立しているのでしょうか。アカエゾマツの林は将来どうなっていくのでしょうか。それらの疑問の答えが、林をよく観察することによってわかってくるのです。そんな自然のダイナミックな営みを肌で感じられる絶好のフィールドに、ご案内しましょう。

#### アカエゾマツの森を遠望

春国岱原生野鳥公園のネイチャーセンターや展望塔から、または対岸の白鳥台センターの展望台から春国岱を遠望してみましょう。ヨシ原の向こうに、水平に広がる黒々とした森が見えるでしょう。この大部分が、アカエゾマツの森です。

良く見ると所々に、立ち枯れて白い幹をさらしている部分もあります。それもそのはず、アカエゾマツの生えているところは、陸地とはいえ海水面にすれすれの高さしかありません。おまけに海が荒れれば、容赦なく塩水が吹きつけてきます。そのような決して良い条件とはいえない春国岱に、アカエゾマツはしっかりと根をはって、森林をつくっているのです。



アカエゾマツの森とタンチョウ

#### ヨシ原を通して林の縁へ

さっそく林に近づいてみましょう。海岸沿いの砂丘から木の橋を渡ると、湖側の砂丘にたどりつきます。この砂丘は海側の砂丘よりずっと以前にできたので、砂丘とは言っても表面はすっかり植物に覆い隠されていて、砂地には見えません。

林に入る前に、ヨシ原の中で大きなアカエゾマツが倒れていたら、根の張り方を見てみましょう。地表からほんのわずかな深さまでしか根が張っていません。これは、土壌がきわめて薄く、また湿地で水分が多いためにわずかの深さでも酸素不足になってしまうからです。

このあたりの大きな木で、樹齢は150~170年くらいです。下枝が大きく張っているのも、こみあった林のなかではなく、日当たりの良い開けたところに成育した木であると推測できます。地層を掘って調べると、一番下層はもちろん砂ですが、草原や湿原になったあと、これらのアカエゾマツが一番に生えてきたことが確かめられます。



根の張り具合はきわめて浅い

アカエゾマツは、本来条件の悪い土地に好んで生える樹種です。火山の砂礫地帯や岩礫地帯、湿原、蛇紋岩地帯などに大きな林をつくります。乾燥や過湿といった悪条件下でも育つ生命力をもっています。しかし一方で、条件の良い土地では、トドマツやエゾマツなどに負けてしまうという性質をもっているのです。

根室地方では、温根沼周辺の湿原と、落石岬の上の湿原にも純林が見られます。春国岱では、砂丘が何列もできて内陸側の砂丘が湿原状になった時、どこからか種が舞い降りてきて母樹となり、瞬く間に広がってアカエゾマツの森ができあがったものと考えられています。



アカエゾマツの母樹だろうか



林床に苔の広がるアカエゾマツコケ群落



更新してくるアカエゾマツの稚樹

### 林内は見事な苔のじゅうたん

さあ木道にしたがって、いよいよ林のなかへ入ります。林の縁にはアカエゾマツの他にヤチダモやケヤマハンノキ、ミズナラなどの広葉樹も少しありますが、林のなかはほとんどアカエゾマツの純林です。そして何といても目を奪われるのは、一面見事な苔に覆われた林床です。まるで深山幽谷のような風景に思わず見とれてしまい、ここがわずか海拔1メートル、海岸から歩いて数分の場所であることなど、しばし忘れてしまいそうです。

昔は材木として伐りだしたこともあったといい、大きな切り株も見えますが、それらもすっかり苔に覆われて自然の姿に見えます。苔の上にゴゼンタチバナやマイヅルソウなど小さな植物があるのも、良いアクセントになっています。林床は湿っぽく薄暗いのですが、木々の隙間から陽が漏れる場所には、アカエゾマツの稚樹が顔を出しています。

ゴゼンタチバナの実



マイヅルソウの花



### トドマツの侵入

順路にしたがって森の奥へと進みましょう。樹皮を見ながら歩いていくと、アカエゾマツの鱗状の樹皮に混じって、途中からトドマツのすべすべの樹皮が現われてきます。林床はやや乾き気味で、大きな木はアカエゾマツですが、若いトドマツが混生しています。空いた場所にはアカエゾマツではなく、一斉にトドマツの稚樹が生えてきています。

アカエゾマツが日当たりを好む陽樹なのに対して、トドマツは日陰でも良く成長する陰樹の性格を備えています。したがって土壌条件の良い場所、ここで言えば林床が乾いてくると、トドマツの方が勢いを増してくるのです。こうしてアカエゾマツの林が、次第にトドマツの林に置き変わっていく様子が観察できる場所があるのです。

アカエゾマツにしてみれば、悪い条件の湿地に根をおろし、土壌を作りながらだんだん条件を良くしたのに、そのあとでまんまとトドマツに乗り取られてしまうのではないですね。しかしこれが植物の遷移そのもののなのです。

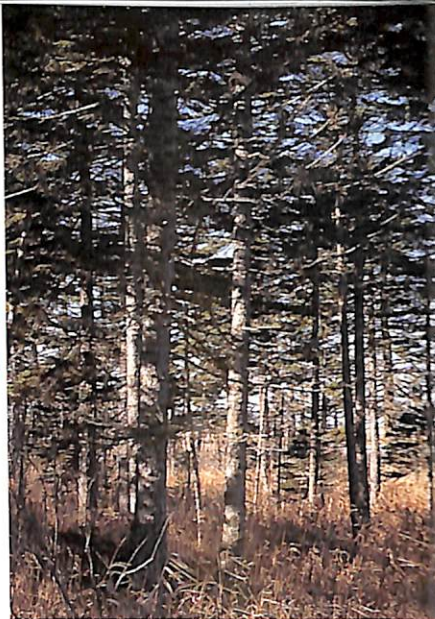
余談ですが、春国岱でも始めからトドマツの林が成立していたと考えられる場所もあります。西側の先端付近がそうです。この場所は、おそらく砂丘が高く水はけが良く、アカエゾマツより先にトドマツが広がったのでしょう。

トドマツ林は乾いたところに成立する



アカエゾマツに混じってトドマツが侵入





## 土壌の堆積と地盤沈下

普通の土地での遷移なら、アカエゾマツはこうして早々とトドマツの林に取って代られてしまうのかもしれませんが。しかし、ここ春国岱には、植生を決定するもうひとつの大きな要素があります。それは地下水位です。

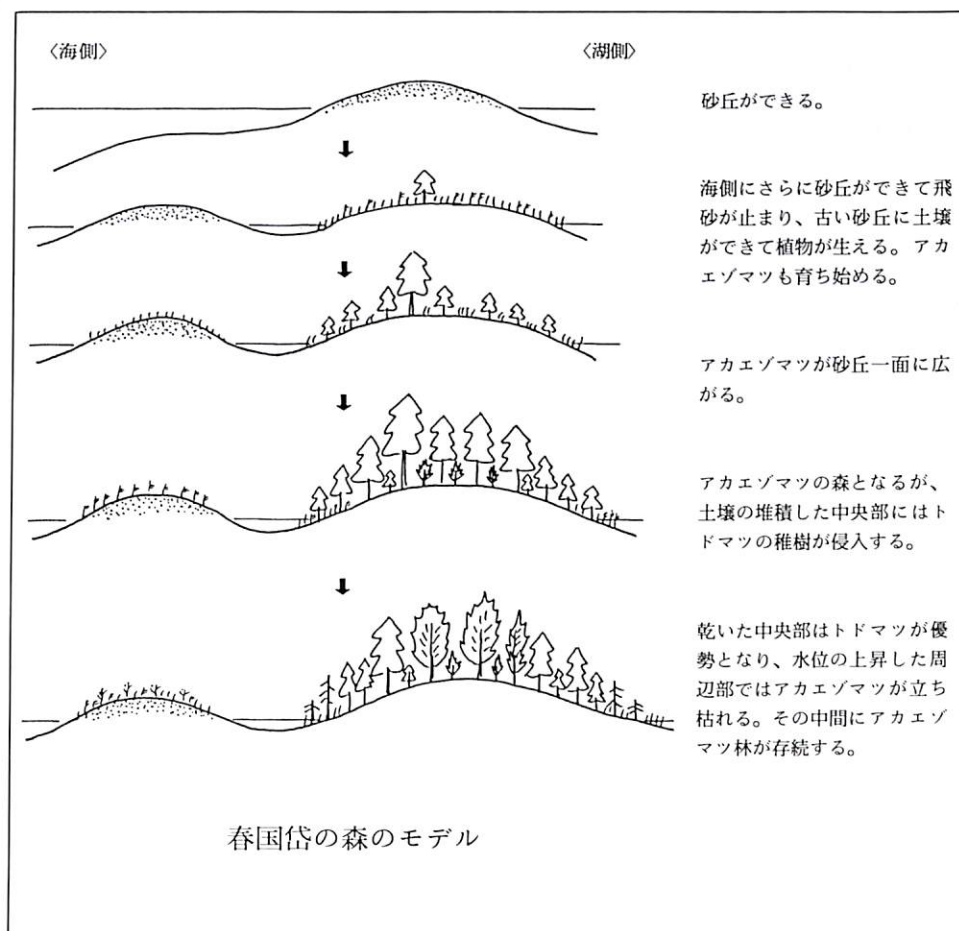
春国岱の砂丘列はおおよそ平坦で、一番高い場所でも海拔2メートル程度です。そのうえ野付半島から春国岱にかけての一带は、地殻の変動で地盤沈下が見られています。時には1年で1cm近くもの沈下があり、この速度には土壌の堆積はかないません。つまり、水位が上昇してきてアカエゾマツでさえも枯れてしまい、ヨシ原に逆戻りといった場所もできってくるのです。

木道は次第に森から湿原の方に戻ってきます。地盤沈下と土壌の堆積を考えながら森を見ていきましょう。砂丘の中心部、比較的高いところではトドマツが侵入してきていました。湿原に近づくアカエゾマツの稚樹が元気に更新している場所があります。このあたりは、しばらくアカエゾマツの純林として残るのでしょうか。

もっと湿原に入り、ヨシが生えてくるとなると、アカエゾマツの立ち枯れさえ見られます。このような風景は、野付半島のトドワラやナラワラと共通するものです。

## アカエゾマツの厳しい生存競争

こうしてみると春国岱のアカエゾマツの森は、トドマツの侵入と戦いながら、一方で水位の上昇におびえながら、せめぎ合いのなかで営々と存在しているのです。最後の図は、春国岱のアカエゾマツとトドマツの林がどんな条件でどう発達し、衰退していくかを推測したものです。こんなダイナミックかつドラマチックな植生の営みが、ここ春国岱では、ちょっと気をつけてみるだけで私たちの眼前に広がってくるのです。



## 生きものたち

近藤 憲久

### 意外に多い哺乳類

野付風蓮道立自然公園の哺乳類は15科40種です。もちろん海で生活する仲間も含めてですが、意外と多いものです。

空を飛ぶ仲間は、コウモリ類です。別当賀や春国岱の森に棲んでいて、そのほとんどはウサギコウモリです。でも、カグヤコウモリやテングコウモリも見付かっていますので、十分な調査をするとまだまだ増えると思います。

海の仲間は、ゴマフアザラシやクラカケアザラシが風蓮湖河口やハルカリモシリ島で昼寝をしているのを見かけます。他に、トドとかミンククジラなども、風蓮湖には入ってこないが外洋の根室海峡で見かけます。でも、クジラやイルカは、以前に比べて乱獲により少なくなりました。

しかし、何と言っても変わったのは陸に棲む仲間です。オオカミとカワウソの2種が絶滅し移入種イタチやミンクなど7種が増えました。かつ、環境も変わりました。風蓮湖では森林の75%近くが草地や二次林となりましたので、増えた種類や減った種類が数多くあります。100年前と比べて種類構成も相当変わったと思います。特に多くなったのは、中・大型哺乳類ではキタキツネ、エゾシカ、小哺乳類ではエゾヤチネズミです。逆に減ったのは、リス類、エゾアカネズミ、ヒメネズミです。

### 別当賀川の動物たち

別当賀川は上流は牧草地帯が続いていますが、下流は森林地帯となっています。そこではいろいろな動物が生息しています。おそらく、野付風蓮道立自然公園の哺乳類の中で、この地域は種類も一番多いものと思われます。ヒグマとかエゾシカ、エゾユキウサギなどたくさんいますが、そのうちミンクとイタチ、それとコウモリ類を紹介します。

別当賀川はミンクが優勢な所で、ミンクは水辺の有利なハビタットを占め、“なわばり”を持っていますが、近縁種のイタチも比較的



① 風蓮湖のゴマフアザラシ

近接して生息し、それを取り除くと直ちに侵入しています。1983年に道が行なった調査で、別当賀川でミンクが4頭捕獲され、その時イタチは捕獲されませんでした。その2ヶ月後のわながけで、同じ場所でミンクの捕獲が1頭でありましたのに対して、イタチは、今度は4頭捕獲されました。このように、動物の世界にも縄張り争いがあります。それを種間関係と言います。

コウモリは夜行性で朝夕薄暗いときにもコウモリは飛びます。環境庁1級ステーションが別当賀川河口にあり、コウモリがかかれば放してやるのですが、その鳥網に良くかかります。また、別当賀川でフライフィッシングをするとそのフライに良くかかるそうです。僕が見たのはほとんどウサギコウモリなので、種類は確かめていないがこれらもウサギコウモリだと思います。他に、モモジロコウモリ、コテングコウモリなどがいます。こちらの方は、数が少ないように思えます。

#### リスの仲間たち

リスは3種類います。そのうちエゾモモンガはどちらかと言うと



② エゾモモンガ



③ エゾリス

温根沼から槍ヶ岳、つまり森林地帯に多いようです。特に、エゾモモンガは前肢と後肢の間に飛膜があり、ほとんど樹上で暮らすため、樹木がないと困るのです。冬、エゾモモンガは鳥の巣箱とかキツキの穴に集団で入ります。エゾモモンガの愛らしい姿はなんとも言えないですが、夜行性なのでただ歩いていると見れないと思います。



④ エゾシマリス



⑤ エゾアカネズミのクルミの食痕

エゾリスも樹上性です。種子やキノコ、果実、昆虫を食べますが、秋になるクルミの食べ方には一定の法則があります。割れ目に沿ってきれいに割り食べます。そして、余ったクルミは土の中とか木の葉の陰に埋めますが、また冬期間雪の中で正確に掘ります。

クルミの食べ方でもう一種類一定の法則を持つものがあります。ネズミ科のエゾアカネズミです。こちらは、前と後に、真ん中から穴を開けます。こちらも貯食し、冬の間中食べた殻が春先地上に捨てられます。クルミの分布は、風連湖岸、特に別当賀川河口に多いのです。クルミの殻を見つけると、そこにどんな動物がいたか想像できます。

もう一つはエゾシマリスです。エゾシマリスは、湿地以外ならどこにでもいます。灌木林とか森林にすみ、子育ての時期は昆虫も食べますが、たいてい種子を食べます。そして意外と多いのがハマナス帯などの海岸草原です。

#### 春国岱の動物たち

春国岱は湿地と乾燥地、森林と草原に別れています。春国岱は3列の砂州（乾燥地）からなり、海から湖に向かって順番に、第一砂丘、第二砂丘、第三砂丘と呼びます。第一砂丘は草原、第二、第三砂丘は森林が続いています。面積は520ha、森林だけだと200haほどですが、昭和20年代だとヒグマもいました。

哺乳類で特徴なのは、カラフトヒメトガリネズミが多いことです。トガリネズミ類は3種類いますが、カラフトヒメトガリネズミは他のオオアシトガリネズミとかエゾトガリネズミに比べて、全道各地で見れば極めて少ないのです。それは、高山性と言うこともありますが、春国岱はそれだけ寒いということになります。

また、湿地にはエゾヤチネズミ、乾燥地にはミカドネズミも特徴



⑥ キタキツネ



⑦ エゾシカ(角のあるのが雄、ないのが雌)

的です。乾燥地(砂丘)がほとんどミカドネズミと言うことは、下草がまばらなコケ混じりのアカエゾマツ林だからです。そのような例は知床半島でも見られます。他に、中・大型動物では、ミンク、エゾユキウサギ、キタキツネ、エゾシカがポピュラーです。エゾシカやエゾユキウサギ、キタキツネは、冬に湖が凍ると自由に往来が可能です。キタキツネは、夏でも多数繁殖しています。ただし、野付風蓮道立自然公園の場合、全道に比べてエキノコックス症にかかる可能性が高いので近寄らない方が賢明です。

#### シカが多い温根沼

シカは夜草地に出て草を食べますが、必ずしも夜ばかりとは限りません。この頃は、平然と昼間でも草を食べてます。しかし、何と言っても隠れ家は林の中です。特に冬は森林で行動します。

温根沼の九番沢林道には縦横無尽の足跡がいたるところあります。4、5頭から数十頭、あるいは100頭にまで及ぶこともあります。また、冬、凍った湖を横断する足跡が数多くみられます。本当にシカが多く、至るところシカ道ができ、道のないところを歩く人間にとって歩き安さはこの上となく便利なものです。

冬、根室は風が強いが、天気が良く、雪があまり降らないため、林の中はかっこうの場所となります。冬は木の芽や樹皮を食べますが、雪が少ない根室では地面を掘って草の芽や球根を食べます。温根沼は凍ってしまうので湖に流れ込む水や海の水、食物、林があつてかつ歩きやすい。そんなわけで、温根沼周辺にはシカが多いのです。多い年には、1,000頭近いシカが温根沼・別当賀周辺にいると思います。

⑧ エゾユキウサギの足跡



#### 海からの侵入者

ゴマフアザラシやクラカケアザラシが風蓮湖河口やハルカリモシリ島で昼寝をしていると言うのを先に書きましたが、この他、トドやオットセイ、カマイルカやイシイルカなど、たくさんの哺乳類が春国岱や野付岬の沖に姿を現します。その死体が春国岱や野付岬に流れ着くこともあります。

1988年には、ザトウクジラが春国岱の海岸に打ち上がりました。まだ、生きていたのですが、何度も沖合いに船で引っ張って出そうとしてるうちに力尽きてしまい、とうとう根室市のゴミ捨て場に埋めました。この他、トドやゴマフアザラシ、カマイルカやイシイルカなどいろいろなものが打ち上げられます。カマイルカの脊椎骨は変わった形をしていて、逆Tの字型をしています。拾った人は「何だろう」と思うみたいで、よく郷土資料保存センターに持ち込まれます。

ラッコの写真は、納沙布岬で1996年に撮りましたが、納沙布岬は春国岱からわずか30kmしか離れていません。ラッコが確認されたのは、ここ数年、我国では納沙布岬しかありません。でも、納沙布岬には、このところ毎年来ます。歯舞諸島の海馬島で繁殖しているのが確認され、近い将来、野付風蓮道立自然公園でも確認されるかも知れません。期待したいものです。

#### 参考文献

阿部永・近藤憲久(1985): 春国岱の哺乳類。春国岱原生野鳥公園基本計画報告書。日本野鳥の会。P.287-298。  
近藤憲久(1987): 哺乳類。道立自然公園総合調査(野付風蓮道立自然公園)報告書、北海道、P.126-137。  
北海道(1988): 野生動物分布等実態調査報告書(キタキツネ) P.81  
写真 栗田真二(1、2、3、6、7、10)  
藤澤進司(9)

⑨ ザトウクジラ



⑩ ラッコ(持っているのが雄のコオリガモ)





野付崎のセンダイハギ

## 四季の彩り

### —— 野付・風蓮の植物 ——

高嶋八千代

北海道の東の端にほど近い、根室半島の付け根に風蓮湖、温根沼があります。どちらも海とは砂州によって隔てられているものの、根室湾に開口部がありそこから海水が入る汽水の湖沼です。海岸沿いに北上すると細長い砂嘴の野付崎とその砂嘴に囲まれた野付湾があります。野付風蓮道立自然公園はこれらの地域からなっています。

海のそばにあるため冬季でも内陸ほど寒くはなりません。根室の記録では最も寒い2月の月平均気温は $-5.3^{\circ}\text{C}$  (1961~1990, 理科年表, 1996) です。しかし夏季には沖でよく海霧が発生し沿岸におしよせます。太陽の光は遮られ日中の気温はあまりあがりません。そこで年平均気温は $5.9^{\circ}\text{C}$  (1961~1990, 理科年表, 1996) と平地としては北海道内でも最寒冷地に属します。この自然公園では寒冷な気候、道東海岸という北の島々に近い立地条件のもとに育まれた、様々な植物を観察することができます。

はりつめた氷がゆるむとやがて春。陽だまりの枯れ葉のなかや枝先で、厳しい冬を生き抜いた植物が葉や花の新芽をのぼしはじめます。さあ潮風に吹かれながら、季節の彩りを探しにでかけましょう。

エゾカワラナデシコ





ノハナショウブと風衝林



ハマシオンと枯損木



ミヤマノキシノブをつけたミズナラ

## 野付崎

海沿いの国道244号線を曲がり、両側に海が見える真っすぐな道をたどると、途中から大きくカーブします。この道は釣り針のような形をした砂嘴に沿っています。

### 海岸草原

砂嘴の上には数列の砂丘があります。野付湾側のなだらかな斜面やトドワラ駐車場より先の砂丘列の上は、北海道の海岸景観を特徴づける原生花園が広がって、春から秋まで色とりどりの花が目を楽しませてくれます。センダイハギの黄色、エゾカンゾウのオレンジ色、低木のハマナスの濃紅色、エゾカワラナデシコのピンク色、ツリガネニンジの紫色、ヤナギタンポポの黄色、その他多くの鮮やかな花々。群生するヤマアワ、ススキ、イワノガリヤス、オオヨモギなどは花園を一層ひきたてます。しかしこの花園は実は牛馬の放牧の影響をうけて微妙なバランスのうえに成立した半自然草原です。シロツメクサ、ナガハグサ、コヌカグサ、オオアワガエリなど牧草からの逸出植物や遊歩道に沿ってセイヨウタンポポ、オオバコなどの踏み付けに強い植物も混じっています。

外海に面した砂原は狭くハマニンニク、コウボウシバのように深くまで根を張り不安定な砂地に強いものとハマベンケイ、ハマツメクサのように葉の厚い多肉質の植物がわずかに生育しています。

### 森林

砂嘴の中央部付近のオンネオンニクル・ポンオンニクルに広い森林があります。森林外縁は樹高2～3mのミズナラ、ダケカンバ、エゾイタヤ、ナナカマド、ハリギリ、ノリウツギなどの茂みです。上部の枯れた木も多く、緑の茂みの上は冬景色のように枯れ枝が突き出ています。オオクマザサがびっしり生えた木立の中を進むと、木の高さはだんだん高くなり、8m以上のものもあるでしょう。ササの少ない所では、避けて通るのも困難なほどのツタウルシがあり、9月なかばに葉は赤く色づき始めます。

この林内には江戸時代末期に5枚の畑が開墾された記録があり(別海町百年史,1978)、必ずしも原生的な森林ではありません。しかし今では林道も痕跡程度です。シダ植物のミヤマノキシノブを着生させた直径1mに近いミズナラが森の主のようにそびえ、トドマツやエゾマツが混生する森林です。



シバナ・アッケシソウ

### 塩湿地と枯損木と森林



風蓮川河口付近



### 湿地

野付内湾側の海と接するあたりは、満潮時には海水が入り込む砂泥質の塩湿地が広がっています。この湿地のいちばん海側の低地にはシバナやヒメウシオスゲの株があり、その間の裸地にはアッケシソウが生育しています。アッケシソウは厚岸にちなんで名がつけられた一年草(日本の野生植物Ⅱ,1982)ですが、秋には赤紫色に染まるためサンゴソウの別名もあります。少し陸側にはチシマドジョウツナギ、ウミミドリ、ドロイ、ウシオツメクサ、ハマツメクサ、エゾツルキンバイ、ホソバハマアカザ、ハマシオンなどが混生します。夏



ハマニガナ



ハマボウフウ

にはウミミドリのピンク色、エゾツルキンバイの黄色の花が緑の中のアクセントです。秋には一変してハマシオンの薄紫の花が一面に咲きそろいます。森林と接する付近はヤマアワが群生しハマナス、エゾオグルマ、イワノガリヤスが混生しています。

竜神崎から先端にかけて東西にはしる砂丘列間の低地にある淡水の水たまりには、ミズゴケ類やスゲ類、湿地性の植物がありますが外見はヨシの群生地です。

### トドワラとナラワラ

オンニクルの森林と塩湿地が接する付近には立ち枯れた木が多くあります。水面に近いほど損傷が進み木杭のようになっています。その奥には樹皮をつけているものや半分枯れたものなどがあります。ミズナラ、ダケカンバ、ナナカマド、エゾイタヤなど樹種に関係なく枯損しています。このあたりの枯損木はミズナラが優占することからナラワラ（原）といわれています。

次にすべての立木が枯れてしまった場所に行ってみましょう。トドワラ駐車場わきの遊歩道を歩くと、塩湿地に横たわった枯れ木や根株が見えてきます。このあたりはトドマツの枯れ木が多いことから、トドワラ（原）と呼ばれます。かつて塩湿地に木が生えていたのでしょうか。現在も続くという野付崎一帯の地盤の沈降（道立自然公園総合調査、1987）とこのあたりを松林として描いた江戸末期の絵地図（別海町百年史、1978）が考えるてがかりとなります。地盤の沈降とともに海水が侵入し木は枯れ、さらに荒涼とした風景を作り出す枯れ木群は風雨にさらされ、この30年間でもだいぶ減りました。

絵地図が描かれてから100数十年間、トドワラやナラワラにあった自然の変遷のドラマは、これからどんな展開になるのでしょうか。

## 風 蓮 湖

風蓮湖は長径およそ23kmの不規則な細長い形をした大きな湖です。本別海から根室半島付け根の東梅まで直線的に発達した砂州によって外海と隔てられています。途中の二か所<sup>はしりこたん</sup>で切れていて、北西側は半島状の走古丹、南東側は島状の春国岱です。この砂州には3列の砂丘があります。海（根室湾）側の砂丘沿いと砂丘列間の低地を横切ってアカエゾマツ林やハンノキ湿地の中を通る自然観察路が整備されています。

### 春国岱・走古丹の海岸草原

根室湾側の砂の移動がある不安定な浜から背後のやや安定した砂地にはハマニンニクやコウボウシバが群落をつくり、エゾノコウボウムギ、ウンラン、ハマニガナ、シロヨモギが混生しています。春国岱の海側の砂丘上ではハマナスが丈の低い大きな群落の帯をつくっています。センダイハギ、ハマハタザオ、マルバトウキ、エゾフウロ、ハマボウフウ、ツリガネニンジン、木本類のナワシロイチゴ、ベニバナヒョウタンボク、エゾノコリンゴなど多くの植物が季節ごとに花を咲かせます。よい香りのするエゾチドリや最近では稀なムシャリンドウも発見できる豊かな草原です。また小規模ながらふつう高山植物といわれるコケモモ、ガンコウランがマット状の群落をつくり、公園域は寒冷な環境にあることを示しています。

潮風や低温に適応し、砂礫地に根をはって生きる植物を見ながら、海を隔てた寒冷地の植物とのつながりにも思いを馳せてみませんか。

海岸草原では、ハマナスやノハナショウブなど咲きそろった花にタイミングよく出会えることがあり、感動もひとしおです。しかし

シロヨモギ



ナワシロイチゴ



エゾチドリ





ムシャリンドウ



コケモモ・ガンコウラン

記録は心や写真だけにとどめてその場を離れたいものです。後から訪れる人たちともその感動をわかちあえるように。

### 湿地

砂丘列間の低地の汽水面と接する付近はここでもやはりシバナ、ウミミドリ、アッケシソウなどの塩湿地植物があります。砂丘下部から低地にかけてはチシマドジョウツナギ、アカハマシオン、ハマイ、ドロイ、エゾツルキンバイ、エゾハコベなどがあり砂丘の海岸草原や林と連続します。

自然観察路が整備されるずっと以前、海岸から林までぬかるむ湿地をおそるおそる歩いたことがあります。林に近い湿地にツルコケモモ、ヒメシダに混じってエゾゴゼンタチバナがありました。日本での主な生育地は北海道東部と聞いていた、この植物をこの地で初めて見た記憶は今も新鮮です。

ハンノキ湿地には木本のノリウツギのほかヨシ、ガマ、イワノガリヤスなどが混生します。野付崎と同様、土地が沈降傾向にあるという春国岱のアカエゾマツ立ち枯れ地にもヨシが群生しています。風蓮湖に流れ込む川の河口付近は三角州が発達し広大なヨシ低湿地となっていて、周辺の丘陵地から遠望することができます。

アカエゾマツ湿地林



ハマナス



ノハナショウブ



エゾゴゼンタチバナ



ツルツゲ

## 温 根 沼

南北に細長い沼です。海への開口部は国道44号線の温根沼橋がかかる所です。湿地が開口部と最奥部にあります。開口部付近の塩湿地には日本では根室のみで発見されているノルゲスゲという寒地性のスゲがありましたが、最近では確認されていません。沼最奥部に流入するオンネベツ川河口付近は湿地性のアカエゾマツ林です。林床は蘚苔類に覆われているかミズバショウが目立ちます。コヨウラクツツジ、チシマウスバスマミレ、ツルツゲ、イワツツジなどは見のがしてしまいそうな小さな花をつけます。

季節は移り、野は薄茶色に変わった初冬、アカエゾマツ林の中にミズバショウの緑の角のような芽がありました。「これから寒い季節がやって来ます。春の陽気が氷をとかすまで気をつけてすごしてね。そしてまた会いましょう。」

コヨウラクツツジ



ミズバショウの芽





①西別川源流部（虹別）水産孵化場

## 豊かな西別川

—— 源流から河口まで ——

河井 大輔

『この地の鮭は魚皮斑点を生せず、緑色にして腹部白く、頭小にして肉肥え紅色を帯び、味最も美にして、西別鮭の名を以て世に知られる』

かつてこのように評された西別川産のサケ（シロザケ）「西別鮭」は、いまから約二百年ほど前、時の将軍である家齊に献上されて以来、将軍家への献上が毎年求められ、知る人ぞ知る蝦夷特産物となりました。明治にはいち早く孵化増殖事業もはじまります。

現在でも「西別鮭」は「別海産さけ」と名を変えて、ちゃんと漁協のパンフレットにも登場します。「……その独特の風味は明治の初期から広く食通に知られております」。

とはいえ、西別川で有名なのはただサケだけではありません。その他さまざまな魚影が豊富な流れとして、道内外から多くの釣り人たちの注目を集めているのです。

### 源流域から上流域へ

根室台地を流れる全長80kmの西別川の源流は、摩周湖（水面標高351m）の水であるといわれます。直接、湖から水が流れ出ているわけではありませんが、湖の東方にそびえる西別岳（標高800m）の地下を浸透し、約三～五ヶ月の歳月を経て、麓に位置する水産孵化場から湧き上がるといわれています。この湧水地が西別川の主水源なのです。

西別岳は麓こそカラマツ林にびっしりと覆われていますが、さらに進むと背の高い樹木はほとんど見られなくなり、山頂まで高原上の景観が続き、あちこちに痛ましい高山植物の盗掘の痕が目立ちます。

頂上に立つと目の前に摩周湖とカムイヌプリが見えます。根釧原野の方向を見ると、雄大な地平線の大地に西別川が曲がりくねったトレースをつけ、オホーツク海に向かって延びる様子がわかります。「牧場の緑」ではない、本物の緑（＝森林）はあまり多くありません。かつて別海原野は鬱蒼たるミズナラの大森林であったといいます。そして各河川の流域にはハルニレの大径木がどこまでも並んでいたといいます。現在の姿からはとても想像できません。

しかし山麓の水産孵化場はまだ天然の森に囲まれています（写真①）。湧水は孵化場の敷地内だけでもひとつではなく、数箇所からこんこんと



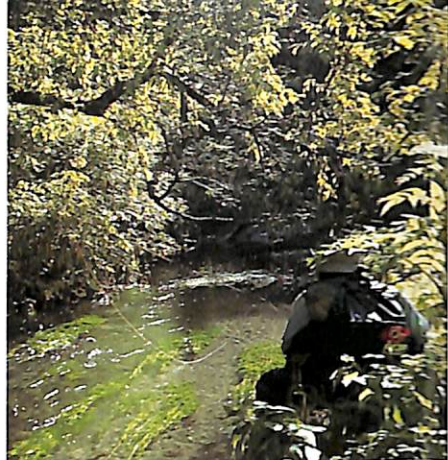
④水生昆虫（ヒラタカゲロウの仲間）

湧いています。そのなんと清冽なこと！ 痺れるほど冷たく、美しく澄んでいます。鏡のような面には滴のような広葉樹の緑が映り込んでいます。流れの下には緑の輝きが眩しいバイカモやクレソンなどの水草が実に豊富です（写真②および③）。初夏には梅に似た白い小さな花がたぶん川面から顔を出し、そんな靡きの奥や河床の石の下にはエルモンヒラタカゲロウやキタマダラカゲロウそしてヒゲナガカワトビゲラなどに代表される数多くの水生昆虫たちが蠢いているのです（写真④）。

するとそれらを餌とする魚の種類も当然多くなります。水源からほんのわずかの間においても、ざっとアメマス（エゾイワナ）、サクラマス（ヤマメあるいはヤマベ）、オショロコマ、ニジマス、カワマス（ブルックトラウト）などが見られます（写真⑤）。ひとつの川の流れだして、同時にこれだけの種類のサケ・マス類が見られるというのはなかなか貴重なことだろうと思います。

小魚の姿も見えます。水草の下にはエゾトミヨやイバラトミヨなど棘魚（とげうお）の仲間が泳ぎ、河床にはフクドジョウやハナカジカがはりついています。魚ばかりではありません。ニホンザリガニの姿も見えます。また、豊かな水草の上で次々に羽化する昆虫たちをもとめて、黄昏時になると周囲の森からなんとコウモリの大群がやってきます。

一方、季節を違えた冬の川では、雪氷と朝靄が醸し出す幻想的な趣に満ちています。



②バイカモの美しい源流域



③河畔林の豊富な上流域



⑤西別川源上流域のサケ科魚類



⑥厳冬期の西別川源流部

川面は黒々とし、すべてが深い眠りに入ってしまったようにも見えます（写真⑥）。

しかし厳寒の中、魚たちを狙って鹿子模様の白っぽい鳥ヤマセミのつがいが姿を見せます。樹氷を背にカン高い声をだしながら、靄に煙る空を舞う凛々しい姿には見惚れてしまいます。ジジッ、ジジッと元気に鳴きながら、川面すれすれに真直ぐ飛んでいく黒っぽい鳥であるカワガラスもまたつがいです。源流がまだ氷と寒気に閉ざされているうちから、早くも春の囀り、恋の歌を口ずさんでいます。そして岸边にはエゾクロテンの足跡が森に向かっててんと続いているのです。

まさに豊かな森が清冽な水を産み、その水が数多くの昆虫を育て、それを糧とする魚や鳥やけものを育むというモデルが、ここ西別川源流部から上流部には見られるというわけです。

### 上流域から中流域へ

ところが西別川のそんな美しい流れも、わずか数キロばかりのうちに、とたんに濁りきってしまいます。中流域になる頃には、あの清冽な流れの面影はもはやどこにもなく、そればかりかなにやら悪臭がするほどです。なぜでしょうか。

川をカヌーで下ってみるとその原因がわかります。ひとつには牛です。たくさんの牛たちが川辺にやってきて水を吞んでいるのですが、同時に、ものすごい量の糞尿を川に垂れ流しているのです。そんな光景が、あちこちで目につきます（写真⑦）。岸边そのものが牧場と直結しているのです。それで牛がどんどん川の中にまで踏み込んでこられるのです。

小型飛行機で川を真上から眺めてみると、そのことがもっとよくわかります。艇上から見ていた以上に、流域の河畔林の幅（面積）が、かぼそいものであることがわかります。水の路を護り、水の量を保ち、水の質を浄化する役割を果たす河畔林が、まるで流れにしがみつくようにしか残されていないのです。

⑦牛の水呑み場となる中流域



⑧牧草場が川岸まで迫る中流域





⑨ショートカットされた流れ（中流域）



⑩流域沿いにだけ繁茂する河畔林（中流域）

一方、岸辺のぎりぎりにまで牧草地が迫っています。これでは川への土砂の流出も防ぎようがありません（写真⑧）。河畔林の失われた淵（カーブ）の侵食は一層その度合をまして、そこには白い護岸用ブロックが積まれていました。別海の市街地近くでは、蛇行する流路がショートカットされて真直ぐになっており、傍らにはかつての流れの名残である三ヶ月湖が点在しています（写真⑨）。川の水量は減り、流れはますます早く、魚たちにとっても棲みにくそうです。

それでも河畔林の中に分け入って見ると、人間ひとりの見渡せる範囲、認識できる範囲というものはわずかなもので、まるでちょっとしたジャングルのような雰囲気さえ感じられる場所もあります。橋の上から見る森もまた色濃く、初夏にはエゾムシクイやエゾセンニュウなどの夏鳥の囀りがさかんに聞こえています（写真⑩）。大木の頂には、時折オジロワシの姿も見えます。川面に張り出した枯木の上にはここで子育てをしたカワアイサ親仔が並んでいました。川岸の崖地にはショウドウツバメがたくさんの穴をあけて、大きなコロニーを作っていました。

#### 中流域から下流域、そして河口へ

河口から3 kmほど上の辺りは、西別全流域を通していても、河畔林のベルトが比較的太いところですが、さすがに水質の浄化までは望むべくもありませんが、西別川はここへきてまた少しその豊かさを取り戻します。カヌーでゆっくり下りながらの自然観察にはとても楽しいものがあ

⑪カヌーで流れを下る（下流域）



ります（写真⑪）。

やがてサケ・マス捕獲場を過ぎると、もう海と川とのつながりを妨げるものは何もありません。まるでそれを示唆するかのように、ウライの上に一羽のウミネコがとまっています。八月の下旬にもなると、海から還ってきたカラフトマスたちの群れが勢いよく水をはじきつつ、次々とウライの中へと飛び込んでいく光景が見られます。

西別川下流における特筆すべき魚の存在といえば、やはり釣り人たちにとってはイトウのようです。60cmクラスは確かですが、この川で竿を振る人々の多くが「巨大なイトウを見た」という話をしてくれるのです。中には「幻の2 mオーバー」などという、まことしやかな武勇伝もあるほどでした。どんよりと濁った穏やかな水面下には、あるいはそうした大魚がいまだにひっそりと生息しているのかも知れません。

本流下流域へと流れこむ支流のひとつに、兼金沼（かねきんとう）からの流れ込みがあります。地元の人からは「じゅんさい沼」という愛称で呼ばれる、ヤチウグイの棲むたまりです（写真⑫）。ここにもまた大きなイトウが棲んでいるという噂もあるそうです。沼のヌシの存在の真偽はともかくとして、ここには春と秋にヒシクイというガンの仲間の大きな鳥がたくさん姿を見せます。彼らは湖上で羽を休めたり、周辺の牧草地で餌を採ったりしています。そして銀色のサイロをバックに悠々と飛ぶのです。なかなか圧巻です。

さらにこの付近に見られるほんのわずかな広さの湿原では、タンチョウが子育てをしているといひます。冬にはサハリン・カムチャッカ・千島列島から渡ってきた美しい衣装のオオワシが現われます。積雪量の少ない河畔林にはエゾユキウサギの足跡が見えます。

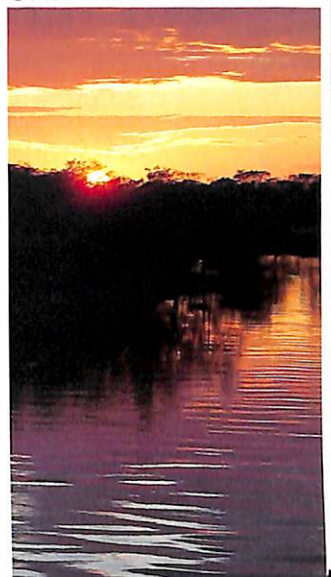
西別川の河口は夕陽がとても綺麗です（写真⑬）。こんもりとした河畔林の向こうに静かに陽が沈みます。秋、それを橋の上から眺めていると、時々、ピシッと川面にシロザケが跳ねます。そして泳ぎの上手な真黒なミンクが、水面からひょいと頭だけを出し、すいすいと手慣れた様子で、岸から岸へと渡っていくのです。

（写真提供 筆者ほかRISE編集部）



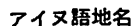
⑫ヤチウグイの遊ぶ  
兼金沼をカヌーで周遊

⑬西別川河口から見た夕暮



本田 克代

- レウンケ 「曲がっている処」。
- イキタラウシ 「笹が多い処」。
- チフイカリウシ 「舟を廻した処」。
- チプル 「舟の路」 茶志骨川下流、コイトイから川口までを言う。



・コイトイ「波が破る処」。大波の時、外海の波が越えて川まで届く。江戸時代ここで舟を引いて川へ出て野付湾へ下った。

津軽一統志(1670)に、その22、3年前の話として「みむろよりのしけ着。…是よりらっこ島くなしりへ渡り申候」の文があり、野付崎はすでに国後島渡海のための要津であったと思われます。寛政10年(1788)択捉島に「大日本恵登呂府」の木碑を建てた近藤重蔵一行も、帰路ノツケへ泊っています。この時すでに鯨漁に、西別、シベツから働きに来る人々の漁小屋が多くあったようです(蝦夷日記 木村謙次 1799)。

寛政11年建造のノツケ通行屋は、5間半×12間の大きさで、他に2軒ありましたが、大破して請負人が天保6年(1835)に6間×18間と大きく建替えました。数年後、他の2軒(蔵)も建直されました(加賀家文書)。通行屋の前には御制札が三つあり、寛政12年の掟や、異国船の件、似せ金作りの件等が書かれていました。三本建っているのは子モロ場所内では他には子モロ、シベツ、アツウシベツだけでした(子モロ場所御制札写並御制場ヶ所書)。

文化4年(1807)ロシア艦のエトロフ島襲撃事件の時、野付在勤は大塚惣太郎(幕府の士)でした。少しも騒がず逃げて来た人を諭して国後島や根室に止らせたので、番人やアイヌは安心してたそうです。函館へ逃げた人は罰せられたので残った人は感謝したとい



写真1 第1砂嘴側から見た通行屋跡の土壘と墓址のある段丘



写真2 残墓石と供養碑歌碑

う話があります。(北海道史人名字彙上 1979)。

天保年間の野付番人(支配人)覚次郎は妻リセを亡くし(天保7年)、厚岸の国泰寺に法名や回向を頼んでいます(日鑑記)。いつ頃から妻同伴の番人がいたのかわかりませんが、「当所ニテ始メテ和人ノ女ヲ見候、誠ニ珍敷コトナリ、皆々和国へ近クナリタルコトカト大ヨロコビ致シ候也」(蝦夷目撃 1854)「番人定住妻アリ」(村垣淡路守公務日記 1854)等の記録から妻同伴は珍しいことがわかります。安政年間に野付番人は、コイトイで働く夫婦の、アイヌ語は達者になったが和語不十分という子どもを預り、読み書きを教えています(協和私役 1857)。子どもがいるのも珍しいことでした。

文政2年(1829)頃はノツケ、アツウシベツの通行屋は、例年10月20日頃から2月中旬迄は無人となりました。それがいつの頃からか冬も留守がいたようです。ノツケ通行屋には番人(支配人)の他にアイヌが8人位詰めていました。渡海用の船が用意してあり船賃や水主(船乗り)の賃銭もきまっていました。航路は国後のトマリ、ネモロ、ニシベツ、アツウシベツ、シベツが主でした(図1)。

野付崎の外海は鯨漁場で、春になると各番屋から人々が集まりました。出張<sup>で</sup>来るのはチャシコツ、ウエンベツ、サキムイ、シベツ、イチャニ、チウルイ、クン<sup>子</sup>ベツ、ベツカイ、ホロモシリの番屋からで、それぞれ居小屋、蔵等を建てていました。シベツは鍛冶家までありました。鯨漁は天保～弘化年にかけて大漁で1万石もとれたことがあったようです(村垣淡路守公務日記 1854)。

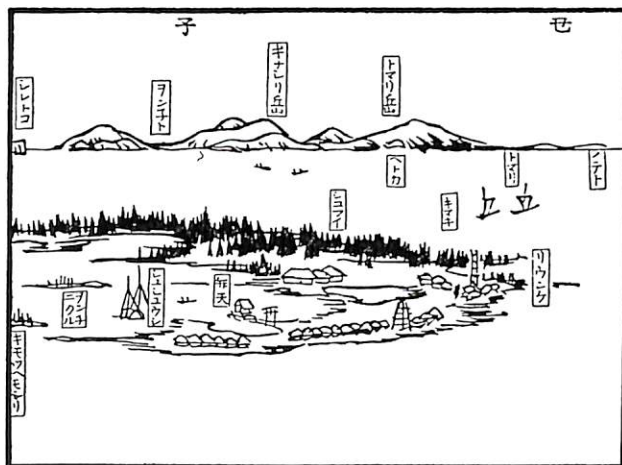


図2 ノツケ崎の図  
松浦武四郎  
東蝦夷日誌より

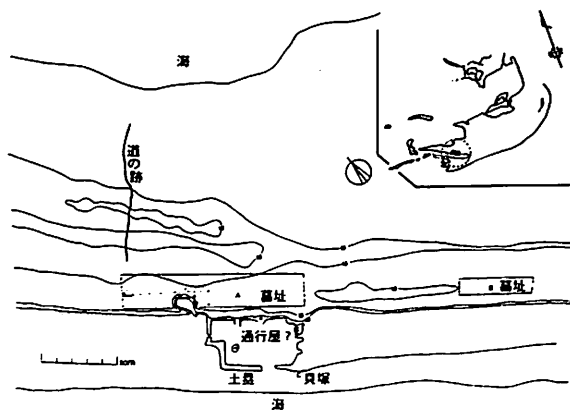


図3 ノツケ通行屋跡、墓址実測図（昭和63年 野付遺跡調査団）

これらの漁のための建物は野付崎、第1砂嘴に30丁（3.27km）も続いていました。嘉永7年（1854）61軒、安政3年（1856）60軒、万延元年（1860）には52軒の建物があり、第2砂嘴上の通行屋と付属の建物をいれると65軒前後の家がありました（図2）。（水野正左衛門様・青山弥惣右衛門様差上書面写 1854。子モロ領地理誌 1855。万延元年会津様江御引渡書付綴込 1860）。

この鯨漁場は弘化年代から汐の通路に砂瀬ができ始めて次第に不漁となり、安政3年には3ヶ所の番屋から漁に来るのみで、他の番屋は子モロへ出かけています（根室旧貫誌 1855）。通行屋の真向いはウエンベツ番屋持の建物があった場所でウエンベツという地名が残っています。弁財船（上方から来る船、100石積以上の船）は第1砂嘴の先端（ウエンベツから先は現在海没している）や第2砂嘴の北側に停泊したと言われています（戸田久吉氏談）。

通行屋の後方、北側に菜園があったようです。安政年間にノツケ番屋支配人であった4代目加賀屋伝蔵はオンネニクル、ボンニクルの森の中に畑を耕し、舟でよい土を運んでいろいろな野菜や穀物を作り、通行屋に泊った人々を驚かせています。今日に言う「客土」をしていたのです。伝蔵はアイヌ語の通辞（通訳）でもあり、筆まめで多くの文書を残しました（加賀家文書）。

幕末には野付崎は会津藩の支配地に入りましたが、具体的なことはわかっていません。

明治時代に入ると交通は発達し、制度も代り、要津としての働きは終わりました。漁も減少し、漁師も少なくなりました。

かつて通行屋があったと思われる所は土塁に囲まれ、海側が入口のように開いています（写真1）。背後の段丘上に上る通路も残り段丘上には墓地（土葬）があり、北側の入江に続く細い道も残っています。菜園の跡はまだ見つかりません（図3・4）。大正時代には墓地に12基の墓石があったそうですが、放牧の馬に蹴散らされて壊れたそうです（戸田利儀治氏談）。現在は3基、少し離れて1基の墓石が残っています。

昭和43年別海村役場は墓址2か所に柵を作り、散らばっていた墓石を集めました（写真2）。「大谷当ね」さんと覚次郎の妻「リセ」さん、離れて「芝田秀三郎」氏の墓石、のみしかわかっておりません。

昔漁小屋が連っていた第一砂嘴は、現在の先端から約2.5kmの範囲に遺構や遺物が散見できます。従来の先端部分は海に没していますから、30丁（3.27km）漁小屋が続いていたことのあかしと言えましょう。かつてあった弁天社の跡はまだわかりません。万延元年には龍神堂もありました。現在の竜神崎より約600m先端よりの所がかつては竜神崎でそこに神社があり、後に尾岱沼へ移し野付神社としたそうです（戸田久吉氏談）。野付神社祠内には「安政5年3月吉、また大坂の宮大工によって造られたことが書いてある」そうで

図4 ノツケ崎墓址実測図（昭和63年 野付遺跡調査団）

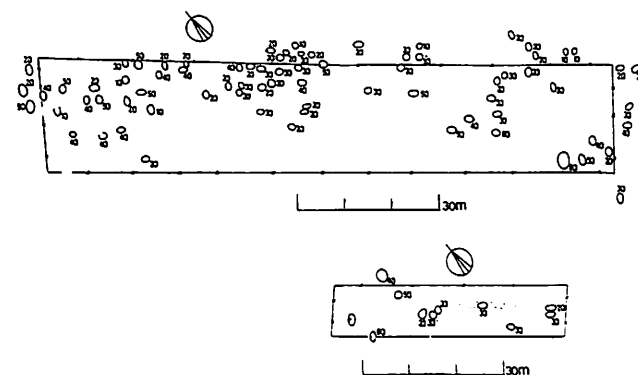




写真3 敷石跡

す(戸田峯雄氏談)。遺構は敷石(写真3)、低い土盛、家跡、かまど跡等で、遺物は陶磁器(各種)、金属(キセル、寛永通宝、大釜破片等(写真4・5)、ガラス(ビール、ワイン瓶)、木製品(柱)等です。

注目したいのはコンプラ瓶という醤油を入れた染付白磁の破片があったことです(写真4右下、図5)。JAPANSCHZOYAの文字が入っており、主に長崎県波佐見で焼かれ、長崎の出島で使用、航海用、又は輸出用の物だそうです。ポルトガル人相手の商人集団をコンプラ仲間(ポルトガル語のコンプラドール=仲買人)と言ったのが語源だそうです(波佐見のコンプラ瓶 1985)。北海道では函館近辺の遺跡や五稜郭、余市大川遺跡から出土しています。第1砂嘴採集のその他の陶磁器片は染付からみて明治4年以降の物が多く見られました。ビール瓶の破片については手がかりが少ないのですが王冠を使用(明治40年より)していないのもあるようです。第1砂嘴の

写真5 大釜破片(鯨釜?)

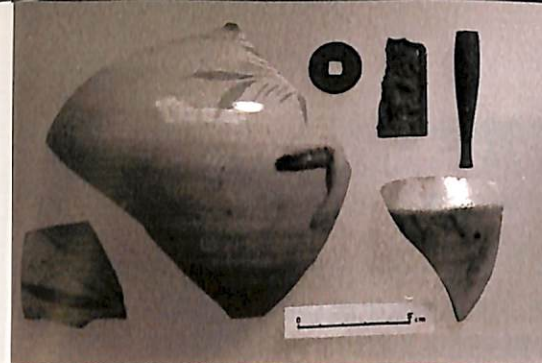


写真4 表採遺物(徳利片、寛永通宝、飾金属板、キセル、コンプラ瓶片)



図5  
コンプラ瓶の例  
(五稜郭のコンプラ瓶)

遺物は江戸時代から大正時代までの遺物が見られるということです。

通行屋跡近辺で表採の陶磁器片は染付から殆んど江戸時代のもので考えられます。

昭和51年、墓址に供養塔が建てられ、昭和57年から自然公園監視員町田正雄氏によって例年7月2日に、野付崎で亡くなった人々の供養が行われています。町田氏没後は娘さんが引継いでおられます。昭和59年には荒沢勝太郎氏を中心とした「キラク先人を偲ぶ会」が不錆銅板製の献歌碑を建立しました。

尾岱沼の街に「幻の町キラク」という言い伝えがあります。「野付崎にキラクという歓楽街があり、遊女もいた、鍛冶屋もあった」等々。昔、鯨漁で多くの人たちが集った、漁小屋が多かった、通行屋の番人(支配人)は妻同伴で、和人の女性は珍しかった、シベツ番屋から出張<sup>では</sup>った建物には鍛冶屋もあったこと等が「幻の町キラク」伝説を作りあげたように思われますが…。



野付崎のエゾスカシユリ

執筆者

|       |                   |
|-------|-------------------|
| 八木 健三 | 北海道大学名誉教授         |
| 高田 勝  | 日本鳥類標識協会          |
| 黒沢 信道 | 日本野鳥の会根室支部        |
| 近藤 憲久 | 根室市教育委員会          |
| 高嶋八千代 | 北海道絶滅危惧植物調査研究グループ |
| 河井 大輔 | フリーライター           |
| 本多 克代 | 根室市郷土資料保存センター     |
| 俵 浩三  | 北海道自然保護協会会長       |
| 佐藤 謙  | 北海道自然保護協会副会長      |
| 村野 道子 | イラストレーター          |

編集委員

佐藤 謙、 福地 郁子、 鮫島惇一郎

編集事務局

山辺 巖 (株)北海道自然保護協会事務局

写真提供者

執筆者のほかに 鮫島惇一郎

野付・風蓮・春国岱の自然

1997年3月発行

編集・発行 社団法人 北海道自然保護協会

〒060 札幌市中央区北3条西11丁目

加森ビル5

電話 (011) 251-5465

印刷 株式会社 広報社印刷

〒064 札幌市中央区南8条西10丁目

石黒ビル

電話 (011) 532-8160 FAX 532-9060